

《翻訳》

アルパナー・ミシュラ「この世界の私たち」

訳・解説 小松久恵

昨日、職場で回覧状が回った。コンピューター・ラーニングの講習を受けに行くのは誰と誰か。5名が明日から受講する。そして一週間後にまた別の5名。残ったものはさらにその翌週から。とにかく全員が行かなければならない。今月中に。例外はない。職場の全員が、コンピューターを使えるようにならなくてははいけない。このご時世、鉛筆でガリガリやっても仕事にならないのだ。私の名前は明日からの受講生名簿に載っていた。銀行の全部の支店から人が集まるようだ。30名ほどになるらしい。一週間の講義。来週から始まる組に入るわけにはいかなかった。そのころには子供たちの試験が始まってしまう。この一週間でさえどうやりくりすればいい？ ああ、実家から誰か来てくれないかしら！ 誰かって誰よ、母以外に誰もいない。けれど母にはもう頼めない。姉たちの手伝いをずっとしてきて、私のときにはもう母の気持ちと体はバラバラになってしまったから。気持ちはあっても、体がついていかない。体が休みたがっていても、気持ちはそれを受け入れられない。ああ、一体どうやって講習を受けに行けばいいの？ いいえ、行けるわけではない。みんなトレーニングを受けて、コンピューターを使いこなせるようになる。でも私には無理。私だけこのまま。そしてどこか、まだコンピューターが導入されていないような場所に飛ばされる。どこか田舎に。そして子供たちの勉強に差し障りがでてくる。そしたら子供たちの将来と私の仕事が衝突する。そしたら私には仕事を辞めるという選択肢がでてくる。そしたら言う人は言うでしょう、だいたい女には無理な仕事だったんだ、と。そして夫の給料だけでは子供たちの莫大な学費をまかなえない。私はまた仕事を探すことになる。また見つかるだろうか？ やりたいような仕事か？ 子供が大きくなってから働く…？

だいたい働かって誰のために働いてる？ 自分のためではない。誰かの出費のために、私は働かざるをえない。では私の出費は…？

朝8時には家をでなくてはならない。職場は遠い。帰宅にも時間がかかる。言う人は言う、9時5時のお役所仕事、時間がかかるって言ったって前後一時間だけじゃないか、と。わかっていない人が言うこと。女ならこんなことは言わない。女が何か言えば、口さがない人たちは言うだろう。「ほら、女は仕事をしたくないんだよな、仕事もせず給料だけもらおうとしている。ただ座ってるだけで、自分を飾り立てることに金をつかうんだ、やれやれ」誰か教えてやって。働く女たちにはお金があっても化粧やおしゃれをする暇がないんだって。なんとか時間をつくろうと頑張っても、ほかの用事が次々にちはだかるんだって。ええ、それでも毎日外に出かけるのだから、それなりの服は必要です。それを言いたい人は言うでしょう、おしゃれにうつつを抜かしているとか気取っている、って。それとも女たちに同情したりするかしら。職場にくるなり家庭の問題をあれこれ数え上げたり、あんまり急いできたから朝ごはんも食べられなかった、とか、お弁当も持ってこられなかった、とか、やっとローティを一口、二口かじりながら出勤した、とか言ったりする女たちに。誰かに今日は化粧が濃いいじゃない？といわれたり、髪の毛に櫛が絡まったまま来て職場につくなり髪の毛を梳かし始めたりして、同情される代わりに笑い物にされるような女たちに。だけど、女たちを笑ったりするような人たちって、自分は身だしなみを整えたりしないわけ？ヴァルマー氏なんてスクーターから降りた途端に道の端で髪を整えて、ひげをセットして、それから目についた汚れをふいて、目をぱちぱちやって目ヤニやなんか綺麗になっているか、ちゃんと見えるかどうか確かめたりしてるじゃないの。それからシャツの埃か何かを払って、自信満々に職場にやってくるじゃない。これ全部、女性が同じことをやったとしたら人は思うかしら…？ヴァルマー氏に一度聞いてやりたい。

回覧状が私のところに来た。名前のところサインをして、「参加」と書いた。

ラーニング・センターはとても遠い。受講する5人で一緒に行くことが決まった。5人の家はバラバラの方向にある。ノーティヤール氏が車を出すことになった。彼の家が皆の真ん中にあるわけではなくて、集合するのに便利

な場所にあるのだ。まっすぐな道。男性4人に、女性は私だけ。職場には私の他にあと二人女性がいる。キールティー姉さんとスメダー。キールティー姉さんは私のかかなり上の先輩だ。みんなのお姉さん。新しく来たダスワール氏は、お姉さんのことを必ずマダムと呼ぶ。お姉さんは誰のことも悪く言わない。お姉さんは来週講習を受ける。今は娘さん夫婦が来ているから。スメダーはいつも病気がちだ。私よりも年下だけど、何かの病気のせいで体が弱い。スメダーの名前も今日行く組に入っていたけれど、彼女はすぐさま休暇を申請した。代わりにサティー氏が行くことが決まった。

サティー氏はすぐに参加を決めることができる。スメダーにはできない。

誰かが言い出す前に、ノーティヤール氏が自分から言った。「どうせ行かなくちゃいけないんだ。一人で車で行くのも、4人増えても同じこと。ガソリンは同じだけかかるんだし。それに一週間だけのことだから」彼のこの理論に皆よろこんだ。この決定に敬意を示して、ヴァルマー氏がすぐさま皆にチャイをふるまってくれた。

8時に家を出れば、8時15分から20分の間にノーティヤール氏の家につく。そこから15キロ先、ライプ村村のでこぼこ道を抜けたら目的地に到着する。スクーターでも行けなくはない。でも皆が言った、バガルワールさん、一緒に行きましょう。みな同僚で、苦楽を共にする。一緒に行くのに、何の問題があるだろう。でも実際のところ、いくらか問題はあある。気持ちの中に、何とも言えない気まずさのようなもの…。

私は助手席に恭しく座らされた。実のところ、男性に囲まれて行くのは少し気まずかったのだけど、助手席に一人でゆっくり座らせてもらおうとずっと気持ちが楽になった。運転席にはノーティヤール氏。後ろには3人の同僚。3人とも私より年上だ。誰かがさっさと前に来て助手席に座ったなら、私は後ろに座らざるを得なかった。私自身、一瞬、後ろに座るべきかとも思った。ノーティヤール氏が車を出した時、ヴァルマー氏がさっと助手席に座った。ヴァルマーさん、すみませんが後ろに座っていただけませんか？私がそう言うより先に、あとの二人が声をそろえていった。「ヴァルマーさん、我々と一緒に後ろに座ってくださいよ」

我々の中で最年長のヴァルマー氏は、その言葉が聞こえないふりをした。

そのときノーティヤール氏が車を前進させて停め、運転席から降りてきた。

「座る場所を今日、決めてしましましょう。そしたら毎日めめなくすむから」

そう言ってノーティヤール氏が全員の席を決めた。ヴァルマー氏は後ろ。

「マダムが安心して乗っていけるようにするのが、一緒に行く我々の義務ですからね」

そう言うと言論の余地を許さず、ノーティヤール氏はヴァルマー氏を後ろに座らせた。ヴァルマー氏は後ろに移ったが、ぶつぶつ不平不満を言っていた。彼の文句が皆に聞こえたが、皆が聞こえないふりをした。私も何も聞こえないふりをした。そうしなければサティー氏が一日中、同情心もあらわに私につきまとっただろう。一日中、何かある度にヴァルマー氏の文句で傷ついた私の心を癒そうとしただろう。誰も聞こうとしなかった、あるいは聞いていないふりをしたが、ヴァルマー氏の不平不満ははっきりと聞こえていた——「一緒に働いて、講習を受けに行って、給料だって同じだけもらうのに、車に座るとなったら女神さまみたいに崇め奉らなくちゃいけないんだからな」「だいたい何で働きに出てるんだよ？こんなにすまして気取ってるんなら、家にいたらいいじゃないか」

もっとも、サティー氏だって陰では似たようなことを口にはしている。女性が職場にいるのは大変だ。気を遣う。女性の前では言いたいこともいえない。前は一人だけだったからなんとかなっていたけど、今は3人もいる。そのせいで職場中で気を遣わなきゃいけない。

他の人たちが何も言っていないというわけではない。私たち女性がいるせいで、みなが不自然になる。どんなに盛り上がって話をしていても、私たちを見るやその話題がストップする。私たちが何か不満を言うだけでも？そんな話をするなんて有罪よ、縛り首にするべきだわ、とか？

「マダムがいるんだ、話には気をつかえよ」後部席からサティー氏が言うのが聞こえた。

「あら、いいえ、どうぞなんでも話してください」思わず言った。

「マダム、あなたは知らないんですよ、こいつらの話は必ず下ネタに行きつくんだから。だから初めから警告しておくんですよ」

「あら！」私は気恥ずかしくなった。私がいるせいで。そのせいでこの人

たちは自由に話ができない。でもこの人たち、なんで普通の話ができないの？私がいなくてもできるような、そんな話題はないわけ？たとえば私も参加できそうな。それともサティー氏は、私がどれだけ皆の邪魔になっているのか、それを思い知らせようとしてこんなことを言ったのだろうか。

どんな話で皆が盛り上がっていたのかわからない。私はいつしか昔のたわいもないことなどを考えはじめていた。

講習初日、私は眠気を覚えながら家を出た。近所の人に、子供たちが学校から帰る時間にはちょっと注意してみてほしいと何度もお願いをした。ごはんの仕度はしてきた。お手伝いの女性にも何度も言った。夕方、食器を必ず洗っておくようにと。前の晩のうちに子供たちの通学鞆に家の鍵を入れておいた。子供たちが帰る時間になったら家に電話しよう。最近、電話はどこのオフィスにもあるし。

昨日オフィスから帰って家のことを終わらせてから、近くの長距離用電話ボックスに行った。パロダーにいるバガルワール氏、つまり夫に電話をして状況を伝えた。コンピューター講習について話した。家の電話では、州を超える長距離電話をかけることができない。料金がかさむからと言って、夫がその機能をつけない。だけど、わたしには長距離電話など必要ない。州外に電話をかける必要があるのは夫だ。それも滅多にないことだけれど。月に一度あるかないか。うちには夫の方からかけてくる。こんな風に我が家では夫が家計に気を配っている。「気を配る」とは、別の言葉では「管理」ともいう。家計簿をしょっちゅう検査するのは夫だ。一冊が終わると新しい家計簿を買ってくる。ほんのささいな出費でも家計簿に記入すること。夫の命令だ。ジャガイモ、玉ねぎ、トマト、小麦粉、豆、衣服、リキシャー乗車代、子供の鉛筆、消しゴム、その他…。時々私は、一日の細かな出費を詳しく書くことにうんざりすることがある。そしてこんな風に書いたりする——100ルピー（玉ねぎ、トマト、砂糖、リキシャー代、ファイルなど）。

こんな風に書けば叱られることはわかっている。家計簿の記述についての私への叱責はパロダーで止まっている。一か月以内にはその叱責がやってくるだろう。それでも私は疲れ切つてうとうとしながら家計簿に書く——

100ルピー（バスン粉、コリアンダー・ペースト、ガソリン、鉛筆など）
 これでは何もはっきりしない。どの品がいくらなのか、何をどれくらいの分量買ったのか。100ルピーのうち、2、3ルピーはあまってもいるはず。けれど、私はバローダーで止まっている叱責を怖がりながらも、時々こんな風に殴り書きをする。ごめんなさい。でも2、3日たつと忘れてしまうのだ、何がいくらだったか、何をどれくらい買ったか。私は困っている。驚いている。疲れている。そのうえにこの忌々しい家計簿…。

私が何か無駄遣いをしているとでも…？

たかがこんなことにも信頼がないの？

ともかく、このコンピューター講習について話すと夫は子供たちのことを心配した。遠いじゃないか。土曜日にならないと俺は帰れないぞ。「やめとけ、そんな講習」そう言い始めた。けれど、講習を受けなければ田舎に飛ばされるんじゃないか不安だと言うと、その不安に同調し、結局こう言った。「わかった。なんとかしてくれ。一週間のことだしな、なんとかなるだろう」

「あなたももうすぐ昇給しますね、マダム！」

「ええ、そうなるといいんですけど」考え事の最中に急に話しかけられたので、そう答えた。

「そうなる、だなんて。みな昇給するんだから、あなただってそうなるに決まってる。昇給があると、転勤もありますね。どこになるだろう、ハリドゥワル、リシュケシ、サハランプル。一番遠くてコートドゥワルか。毎日通勤が大変だな。」

「いい手を教えましょうか」サティー氏が言った。

「はい」私は「いい手」について期待もせずに答えた。サティー氏の言ういい手は、聞いたところで納得できるようなものではない。たとえば、休みが取れるかどうか心配だったら、サティー氏に相談してごらんさない。サティー氏はアドバイスしてくれるでしょう。「女なんだから、なにも心配することなんてないじゃないか。政府が女性には特別な休暇を保障しているだろう。中絶したっていう診断書を作ればいい。100ルピーもあれば偽造できるよ。

それで1週間、のんびり楽しめばいいじゃないか」

まったく、サティー氏は放っておきましょう。だけど、もしそれがいいアイデアだと思うなら、どうぞ診断書を偽造してください。

「昇給しなかったらな、転勤も我慢するしかないんだよ」

今度のつぶやきははっきりしていて、そしてそこには皮肉もなかった。なあ、あんたにちょっと言ったこと聞こえただろ、じゃあわかるだろう？といった感じ。特別扱いしてほしいのはみんな同じなのに。昇給も、特別扱いも欲しがらなうて。そんなつぶやき…だけど彼をとがめられる人なんている？私たちは「同じ穴のむじな」でコンピューターを習うために遠くまで行かざるをえない。キールティー姉さんだって、あの年齢にもかかわらず回覧版に「出席」としていた。誰が彼に言い返すことができる？なんて言える？

昼休憩になって、私は電話のところまで走った。走り寄ったのは私だけ。おどろいた、他の誰も電話に走り寄ったりしない。ヴァルマー氏はぶらぶら歩きながら、誰かと携帯で話をしていた。ノーティヤール氏も立ったまま携帯を取り出していた。これまでサティー氏が携帯を持っているのをみたことがなかったが、今日は彼も携帯を片手にぶらぶらしている。一緒に来た4人目の同僚、ニルマル氏も携帯を持っている。本来無口な人物だが、携帯ではいつまでもしゃべり続けている。まるで携帯の中に恋人がいるみたいに。彼にはお相手がいるらしいという噂があった。誰かいい人がいるらしい。私はよく知らないけれど。そんな浮いた噂話に私も加わったことがある。他の人たちもそれぞれ携帯を片手に歩き回っている。私だけが電話の受話器を持ち上げて何度も耳に押し当てては、また戻し、また持ち上げて、電話が通じていないことを受け入れられないでいた。

「僕の携帯をつかったら。昨日の夜、誰かが電話線を盗んだらしい」

「そうなの！？」私に何がいえる？サティー氏の携帯を借りて家に電話をかけるべきだろうか。

「子供さんにかげなくちゃいけないだろう」

ノーティヤール氏もやってきた。私は皆の同情的だった。

「なんで携帯を持たないんだ？」ヴァルマー氏が訊いてきた。いつもの不満げな口調ではなく、はっきりとした口調で。

「ずいぶん前から考えてはいるんですけど」

「考えなくていいから、買いなさいマダム。最近1200ルピーほどで買えるんだから。買いなさいよ。女は決断するってことができないよな。泣くだけだ。」

最後の部分はヴァルマー節だった。いくぶんそっけなく、いくぶんはっきりした口調。本当に嫌な気分になった。押しつけがましいアドバイスより、そっけないけれどはっきりした言葉にショックを受けた。

「家の電話番号は？」サティー氏がえらそうに訊いてきた。選択肢は二つだけ。サティー氏かノーティヤール氏か。ここでヴァルマー氏に頼むのは、どれくらい正しいだろう？それに4番目のニルマル氏、皆から離れたところで、電話越しの会話に夢中になっている。

「ヴァルマーさん、電話を貸していただけますか。ちょっと子供に電話をしなくてはならないので」

自分でもなぜかわからないけれど、急に二人の申し出を断ることに決めた。ヴァルマー氏は黙って携帯を差し出してくれた。

このとき私は何を考えていたのやら！

家に帰って家事や子供の用事をすませ、少し休憩してから出かけた。上の娘を連れて、スターターをほんの数分走らせ、銀行のATMまでやってきた。夜8時だった。

本当に愉快で、素敵な、そしておかしな話だ。携帯を買っただなんて。わたしの携帯。子供たちは大喜びで、ボタンをあちこち押しははどうなのか、仕組みを知ろうとしていた。一刻も早く。上の娘ははしゃいで私に抱き付いてきた。

「ママ、最高」娘は真剣にそう言った。

携帯がどうなっているのか、よく理解できない。ただどうやって電話を受けるのか、家にかけるのはどうすればよいのか、それだけは覚えた。

これで子供が話をしたくなったら、私に電話をかけてくることができる。私もそうしたいときに、子供たちの様子を訊くことができる。科学のこの発明に今日、私は感謝した。

私は携帯を持っている。私の携帯。私だけの。

子供たちは電話番号をもう一つ覚えた。ノーティヤール氏、サティー氏、ヴァルマー氏とは別の。自分たちの母親の電話番号。

あれこれしているうちにすっかり遅くなり、近所の長距離電話屋については夜10時を回っていた。夫の携帯にかけて、この電話番号をメモしてくださいと伝えた。私の携帯番号。慌てていたせいで、自分の携帯からかければ良いことに気が付かなかった。夫は言った。「馬鹿じゃないのか。そんな無駄遣いする必要がどこにある？」だから私は今日、電話が通じなくて子供たちに連絡を取ることができず、どれだけ大変だったのか話して聞かせた。夫は話の途中から不機嫌になった。「何かあれば、子供たちはノーティヤールさんかヴァルマーさん、サティーさんの誰かに電話をかけるだろう。なんでお前はわざわざそんなことをするんだ？」私は熱心に夫を説得した。最後には夫も言った。「わかった。買ってしまったものは仕方がない。あちこちに番号を言って回るなよ、個人的なものなんだ携帯は。あちこちかけるなよ」

夫の言う通りだと思う。誰にも電話番号を知らせる必要なんてない。大体、私の交友関係は職場に限られているのだから。

翌朝またノーティヤール氏の家にスクーターを停め、皆で車に乗り込んだ。前の日の通りの席順。静かな車内に何かの音が鳴り響いた。驚いた。私の携帯からだ。こんなに早く携帯を持ったことが知られるなんて、思いもしなかった。

「誰のだ？」サティー氏が後ろから叫んだ。次の瞬間、またしても鳴った。もうごまかしようがない。

「私のでしょうか？」バッグから携帯を取り出した。

「メッセージを受信したんですよ」

こんなにはやく、誰がメッセージなんて？

携帯会社からの、広告メッセージだった。サティー氏が大笑いした。

「一度、僕の携帯を鳴らしてみてください。そうすればあなたの電話番号が登録できますから」ノーティヤール氏が嬉しそうに言った。

「おめでとう、マダム」ニルマル氏が言った。

「おめでとうはヴァルマーさんに言ってください。あんな風にきつく言われなかったら、これを買ったりしませんでした。」私は言った。

「どういたしまして」ヴァルマー氏がはっきりといった。

私は自分の携帯から彼らにかけると躊躇した。でも私の番号を伝えて何が悪いの？みんな困った時に助け合う友人じゃない。たとえ彼らがそれを認めないとしても。だいたい、この人たち以外に番号を教えるような知り合いがいる？誰もいない。そして私はノーティヤール氏が言う通りに彼の携帯を鳴らし、サティー氏にも同じようにした。

「私はサティーさんからもらうから」ヴァルマー氏はそう言った。

「ちょっと携帯サ見せて下さいよ」ニルマル氏がそつと言った。彼は東部の出身で、機嫌がいい時にはそのお国訛りが出てくる。

私は携帯を後ろの席に渡した。

「勇気が要ったでしょう、マダム」

サティー氏はニルマル氏の手から携帯をひったくって言った。

「勇気が要るようなことじゃないでしょう。ずっと前から考えていたことだし」強い口調で言うと、サティー氏は気まずそうにした。私がこんな反応をするなんて思わなかったのだろう。

「いい機種だね」そんな言葉とともに私の携帯が後ろの席から戻ってきた。そのとたんにまた呼び出し音が鳴った。「ああ取らないで、私がかけたんだ」ヴァルマー氏が軽く言った。

「さあ、これで我々はあなたに昇給おめでとの電話をかけることができますね」

「うちの支店長にも番号を伝えときなさいよ。通知が来たらすぐに電話をくれるだろうから」

「おい、マダムが教える必要ないじゃないか、僕たちの中の誰かが教えればいい」

「いいえ、自分で言いますから」私は少しむっとした。まったく、携帯一つでこの騒ぎ。けれど私もこの携帯騒ぎをほほえましく思うようになっていた。

こんな風に携帯についてあれこれ話をしているうちに、いつの間にかラーニング・センターに到着していた。これまで、彼らの携帯話にこんなに関心をもったことはなかった。キールティー姉さんは携帯を怖がっている。一昔

前の人間だからと携帯の話をすることを拒む。スメダールは携帯を持ってはいるが、いつも家に置いてくる。たぶん固定電話の代わりに使っているのだろう。もしくは携帯はご主人のもので、朝晩だけスメダールのものになるのかもしれない。それを自分ののだと行って、ことあるごとに携帯の話題を持ち出しているのかもしれない。まあでも、彼女のところに携帯があるのは本当だ。それを触って操作するやり方も知っている。必要となれば、いつか会社に持ってくることだってあるだろう。この件に関しては、彼女はわたしよりいくぶん先を行っているといえるだろう。

私にとって講習は実際には今日から始まったようなものだった。今日は集中することができた。今日はコンピューターが理解できた。全員がお互いに教えあって、学びあった。気軽な雰囲気で教え学んだ。みんな仲間。先生レベルのひとは誰もいない。教えるひとは誰もえらそうにはしなかった。その人だってそこまで良くできるとはいえない。それに私たちに必要なのは、コンピューターの基本操作を学ぶことだけ。想像していたほど難しくはなかった。

「しょせんお役所仕事なもの」誰かが言った。

子供のために生きてきた人生に、どこからか生きていく喜びの波が押し寄せてきた。人生が、何か素晴らしくて、意味のあるもののように感じられた。何かを得ることができたような。何か素晴らしい感情に満たされたような。力強い、誇りに思うような、存在感に満ちた。子供のようにはしゃいだ、そして我が家のように安心する、そんな何か。みんなを身近に感じるような、そして私自身のものになった何か…。

講習も最終日を迎えた。終えて家に帰ってみると、夫もバロウダーから帰ってきていた。

「いつ着いたの？」そう尋ねながら急いで台所に向かった。二時間ほど前についたのだろう。そう予想した。携帯に知らせてくれても良かったのに。まあ、びっくりさせなかったのでしょう。夫は私の問いに答えるかわりに、携帯を見せるように言った。私は手を拭ってバッグから携帯を取り出して渡した。夫が興味深そうに受け取ったので、うれしく思ったけれど一方では少し心配もしていた。こんな質の悪い携帯を買うなんて、と叱られるのではないかと。

夫は携帯をいじりまわし、着信音を鳴らし、そしてアドレス帳をチェックし始めた。そして変に固い声で尋ねてきた。「アドレス帳にこんなにたくさん登録。いったい誰の番号だ？」

私は台所にいたのでそこから答えた。「職場の人たちのよ。」

「ふうん。」夫はさらに不機嫌になった。感じ悪い。非難されるようなこと？電話なんだから、番号が登録されるのが当たり前じゃない。

「余計なことをせずにいられないんだお前は。あちこちに番号を知らせるなど言っただろう。それなのにいい恰好して。いつか変なことに巻き込まれるぞ」

「変なことがなぜ起きるの？みんな同僚なのに」口に出しては言わなかった。何て言えばいい？言ったところでまた余計なことだと言われるだけ。

夫は携帯を自分の膝の上に置いた。お茶をどうぞと私はまた言わなければならなかった。

「問題ばかりだ、上からも、…」夫は心のうちを最後まで言わず我慢したのだろう。「上からも」の先は私のことだろう。私のこの新しい携帯問題。遠くから帰ってきたし、早くお茶が飲みたかった。けれどその気持ちもなくなった。お茶をテーブルの端に置き、一日留守をしていただけ散らかった家の片付けを始めた。子供たちの制服をベッドから拾い上げ、どれだけ汗臭いか確認した。まだ洗わなくてもいいみたい。たたんで置いた。靴下を拾い上げて、靴の中に入れた。靴下は汚れていて、すえたようなにおいがしていたけれど、それでも靴の中に入れた。「今度は洗濯機を買わなくては」そう思った。この考えは今のところ保留にしておいて、弁当箱を洗おうとベッドの下に落ちている通学鞆を拾い上げた——「お弁当箱を出しなさいって言ったでしょう？」

子供たちはいつものように私の言葉に返事せず、私もいつものように鞆から弁当箱を出した。そのとき突然着信音がした。わたしはひどく慌てた。携帯は夫の膝の上だ。そちらに手を伸ばすと、夫は手ぶりで私を止め、電話に出た——「もしもし、A.P.バガルワールですが。ええ、ええ、お待ちください」そう言うとそばのテーブルに携帯を置いた。ただ置いただけではなく、私に喧嘩を売るようなやり方で。さあ！でてみろ、俺の目の前で！

電話に出た。

夫はしばらくそこに立っていた。「はい」さえ満足に言えていないような気がした。それから夫は大きな音を立ててテーブルに何かを置いた。新聞か、自分の手。もしかすると新聞と手の両方。それからぶつぶつ言った——「忌々しい着信音だ。耳に唐辛子でも突っ込まれたみたいだ。」

夫はそこに立ったままだった。私は電話を切った。

「誰から？」夫は訊かない。

「ノーティヤールさんからだったわ」私が言った。

「何の用だって？」これも訊かない。

「銀行で昇給とか転勤とかのリストが発表されたって。その話だった」これも自分から言った。

夫は背中を向けた。何も言わずに。子供たちは部屋の外のテラスにいた。夫は子供たちに勉強しなさいと言い始めた。わたしも自分の用事にとりかかった。携帯はそのまま机の上。

夫は子供たちのノートをチェックしていた。子供たちを問いつめ、叱りつけていた。叱っている最中、急に言いだした。わざとらしく大きな声で、私に聞こえるように——「ママは今日、携帯を買った。明日は車を買うぞ。そのうちにこの家だって小さいと感じるくらいに立派になっちゃうぞ」嫌な感じだ。何を言っているの、子供の前で？そう言おうとした。けれど私の前に来ると夫は笑い出した。変な笑い声で。私は、スクーターが必要になった日を思い出した。あの時も今日と同じで、夫はだんだん普通に戻っていった。突然の変化を受け入れるのは難しいことなのだろう。だけど変化はやってくる。必要になるものはこんな風に変わり続けるのだ。そう考えて私は夫をとがめるのをやめた。

携帯がまた鳴った。ノーティヤール氏だろう。リストを見たら教えてくれるといていたから。さっきの緊張感も忘れて、携帯に飛びついた。ほんの少し前に電話に出たときはあれだけびくびくしたのに、そのことも考えられなかった。ノーティヤール氏だった。皆の昇給や転勤について教えてくれた。どこに誰が行くのか？どんな変化があるのか？今回も転勤しなかったのは誰か？サティー氏が転勤せずにする方法を何やら言っていた…ヴァルマー氏は転勤したくないらしい…

「どっかの男からだろ」

夫がとても嫌な声で言った。はっきりと聞こえた。けれど私は電話でノーティヤール氏と話しつづけた。

夫が足音も荒く外に出ていった。こんな夜遅くに。夫は訊かなかった——「誰からだ？何の用だ？」

わたしも言わなかった——「ノーティヤール氏から。他の人の昇給や転勤、それから私の昇給と転勤も。場所としては良さそう。転勤、承諾するわ。」

【テキスト】

Is Jahan Men Ham 『Chavani Me Beghar』 Alpana Mishra, Bharatiya Gyanpith, New Delhi, 2008.

【解説】

著者アルパナー・ミシュラ (Alpana Mishra 1969-) は、ヒンディー文学界でいまもっとも高く評価されている新進作家のひとりである。彼女の作品のいくつかはインド国内の複数の大学で教材となっており、2016年現在、三冊の短編集と一冊の長編小説、そして作品集が一冊出版されている。ミシュラは作品において、現代インドのさまざまな社会問題を取り上げており、それらの作品は実体験や徹底した調査に基づくとされる。

訳出したテキストは2008年に出版された短編集『Chavani Me Beghar』に収められた一篇であり、働く女性が主人公である。この短い話の中に、インド社会において働く女性、特に働く母親がどのような困難に直面するのが端的に描き出されている。主人公は国営銀行で働く二児の母である。夫は別の州に単身赴任中で、週末になると帰ってくる。銀行のコンピューター化に伴って、全行員が講習を受けることになった。職場の男性たちは何の問題もなく講習に通うことができるが、主人公を含む女性たちはそういうわけにはいかない。主人公もまた、講習を受けるために夫から「許可」を得、そして家事をやりくりしながらなんとか講習を終える。

彼女をふくめ、職場には女性は3人しかいない。男性社会の職場で、女性に向けられる視線は決して心地の良いものではない。厳しい環境の中、女性

は何のために働くのか。主人公は冒頭で自問自答している。「わたしは誰のために働いてる？自分のためではない。誰かの出費のために、私は働かざるをえない。」家計はもちろんのこと、彼女自身の出費は夫に「管理」されている。ここでは女性の就業と経済自立とは、単純に結びつくものではない。

作中、主人公は必要に迫られて携帯電話を購入する。現在のインド、特に主人公のような都市在住のミドルクラスでは、一人一台の割合（あるいはそれ以上）で携帯電話を所有している。けれど作品の舞台となっている2000年代初頭は、携帯電話がようやく普及し始めた時代であり、携帯を購入することは作中に描かれる通り「素敵な」出来事であり「勇気のいる」行為だった。この携帯電話の購入に、主人公の夫は過剰に反応する——「ママは今日、携帯を買った。明日は車を買うぞ。そのうちにこの家だって小さいと感じるくらいに立派になっちゃうぞ」以前にスクーターを購入したときも夫は同様の態度で主人公を悩ませている。必要なものを自身の給料で購入するという一見当たり前の行為が、許されていない。また携帯電話やスクーターは単なる物質ではなく、それによって世界が広がることの象徴でもあるだろう。夫は妻が自身の支配が及ばない世界へと踏み出すことを恐れるが、その恐れは単純化されて不貞の疑惑へと読みかえられる。ゆえに夫は妻と同僚とのやり取りに過剰に反応したり、あるいは完全に家計を支配しようとしたりするるのである。

作品に描かれた働く女性、働く母親に向けられる期待（あるいは期待を装った強制）と、それに応えるための女性たちの奮闘。さて、この図式はインド社会特有のものなのだろうか。

この翻訳は、原著者 Alpana Mishra 氏の承諾を得たものである。訳者の問い合わせに許可をくださったばかりか、翻訳上の複数の質問に快く答えてくださった氏に心より感謝申し上げます。